経済理論の客観性（３）

佐藤　順一

第四節　古典力学

（1）理論素材の選択

この節の直接的課題は古典力学の論理世界を探究することにある。その古典力学を経済理論の構築者が承認し摸倣するとき、経済理論は大きな困難に直面する。この困難を整理し、経済理論の論理世界を考察する際の教訓を得ることが、間接的には本節の狙いとなる。この節の課題を解決することは極めて困難であろうことは、私も十分に承知している。同時に、この課題を解決することは重要であるとも、私は信じている。そこで、私の能力を省みず、敢えて思考実験を行なってみた。本節はその中間報告である。取り上げていない論点も多く、触れることはできても明確には解決できなかった問題もある。その点はお許し願いたい。

現時点における思考実験の方法と結果を私なりに整理し報告するのに予想外の字数を要したので、第四節を二回に分けて掲載することにした。前半部分では、最初に、経済理論の論理世界を考察することを目的としているこの試論の第四節で敢えて古典力学の論理世界を探究する、その理由と方法を説明しておく。次いで、古典力学の理論構築者が理論構築の素材を選択する作業にまつわる諸問題を検討する。その主要な舞台は前節で説明した三世界図式のうち日常世界である。現象世界と分析世界および構築された論理整合的理論に関する思考実験の方法と結果の説明は次回に回す。

経済理論は古典力学を摸倣することで社会科学の女王となったといわれている。その意味では、経済理論の論理世界を考察することを目的とするこの試論で古典力学を取り上げても、それほど異常なことではないだろう。しかし、摸倣したことをもって同じ性質の理論が構築されると即断するならば、それは驚くべきことである。いうまでもなく、古典力学と経済理論とでは理論構築に使用する素材の性質は異なっている。理論素材の性質が異なれば、両者の間では現象世界と分析世界にも違いが生じる。その結果、古典力学と同じ方法を適用して構築された経済理論は、たとえ論理整合性の点では遜色ない出来であったとしても、その他の面では古典力学とは異なった性質をもつことになるはずであろう。

経済理論と古典力学の間で論理世界に相違が生じるなら、古典力学を摸倣した経済理論の論理世界を考察する作業はこの相違をできる限り明確に把握することから開始されるべきだろう。この節では、その観点から古典力学の論理世界を探究している。したがって、私は両者の共通点よりも相違点に着目する。それだけに、古典力学の論理世界を追究する私の姿勢は極端であると批判されることは覚悟している。

経済理論の構築者が古典力学の理論素材とは性質の異なる理論素材を扱っていることを意識せずに古典力学を摸倣しているのだとすれば、経済理論の論理世界には多くの疑問や混乱あるいは矛盾が生じることになるだろう。古典力学を模倣した経済理論の構築者はこれらの問題点を重視していないようにみえる。しかし、私は、古典力学の論理世界と比較しながら経済理論の論理世界を考察したいと思っているので、これらの問題点には重大な関心を払わざるをえない。これらの問題点は、経済理論の論理世界を考察するときに留意すべき論点を示し、また考察方法に示唆を与えることになると、私は期待している。次節では、これらの示唆を経済理論の論理世界を考察する作業に対する教訓として生かすべく努めたい。

残念なことに、私は古典力学の専門家ではない。そこで、最初に古典力学に対する私の理解の程度を白状しておくことにする。しかる後に、この節で私が取り上げる課題をできるだけ明確に提示し、私が古典力学の論理世界を扱うやり方を説明する。その説明の中では経済理論の論理世界との相違を際立たせるために極めて極端な言い方をすることがあることを、予め断っておきたい。

私が本節で取り扱っている古典力学はニュートンの名前と結びついている。古典力学は、林檎が樹から落下する現象や惑星が太陽の周囲を回転する現象などを説明することを出発点として構築された、精緻な理論体系である。古典力学に対する私の理解はこの水準を超えるものではない。その私でも、古典力学の理論体系は現実的で客観的かつ普遍的な理論であると広く認められていることを承知している。この点に憧れたからこそ、経済理論の構築者は古典力学の摸倣を試みたのであろう。この判断が正しいとすれば、経済理論における論理世界を考察するときには、私が切り口として選択した客観性に加えて、現実性や普遍性にも注意を払っておく必要があることになる。

とはいえ、現実性や客観性および普遍性に関する一般的な議論を最初に展開し、その帰結を基準として古典力学と経済理論の論理世界の優劣を判定しようとは、私は思っていない。私が本節で採用したやり方は、古典力学と経済理論の間に横たわる論理世界の相違を念頭におきながら、古典力学の理論構築者が行なう理論構築作業を理解することを通して古典力学の論理世界を探究する方法である。この節の前半では、古典力学の理論構築者が理論素材を選択する作業を検討することを通して、選択された理論素材の性質を追及してみる。

古典力学の理論構築者は、精緻な数式を用いて力の作用とその釣り合いを一般的で厳密な形で定式化し、論理整合的理論を展開している。経済理論の構築者はこの点に魅力を感じているようである。しかし、私の判断では、精緻な数式の利用と力の釣り合いに対する着目は理論構築の方法に関係するにすぎない。ところが、私は、経済理論が実際に採用した理論構築の方法が古典力学のそれと実際に同一であるかどうかを検討したいわけではない。また、構築された経済理論が論理整合性や論理形式の面で古典力学と同じ水準に達しているかどうかを詮索するつもりもない。私は論理世界に着目しているのである。

私が本節で古典力学の論理世界を探究する背後には、経済理論と古典力学の論理世界の相違を比較する視点がある。比較するためには、比較の対象を共に眺めやる土台あるいは両者を同時に

把握しうる枠組みを設定することが必要である。古典力学と経済理論とで論理世界に相違があるのは、理論素材の性質に違いがあるからである。理論素材は日常世界の中に現れてくる。それゆえに、私が設定する枠組みに日常世界は不可欠である。また、論理整合的理論の論理的基盤として現象世界と分析世界に注目しなければならない、と私は考えた。こうして、私が設定する枠組みは日常世界と現象世界および分析世界から構成されることになる。この枠組みが前節で説明した三世界図式である。

この三世界図式は、古典力学と経済理論の論理的基盤を眺めるときに必要な共通の枠組みとして組み立てられていた。古典力学と経済理論の間に見られる論理世界の相違を意識しながら古典力学の論理世界を探究していく作業は、この単純な三世界図式を古典力学に即して精緻に描き直し、修正する作業となる。描き直された精密画には、単純な三世界図式には現れていなかった諸要素が登場する。また、要素と要素の間は多様で複雑な線で結ばれる。これらの線によって構成される図柄は単純な三世界図式とは異なった印象を与えることにもなる。この印象の相違は、古典力学と経済理論の間に横たわる論理世界の違いと結び付いており、経済理論の論理世界を考察するときに着目すべき論点を浮き上がらせるに違いない。このように私は期待している。

古典力学における日常世界と現象世界および分析世界の状態を描いた複雑な精密画を混乱なく読み解くためには、もうひとつの複雑な事情を知っておく必要がある。私は、古典力学の理論構築者が行う作業を把握することを通して古典力学における三世界図式の精密画を描きたいと思っている。その私は、古典力学の理論構築者が行う作業の全体を見渡すことができ、その帰結をも把握している。当然、私は完成した精密画を知っている。一方、私が設定した古典力学の理論構築者は、精密画が完成する前に、完成した精密画を知らないままに、精密画を完成させるための作業を行う。そのように私は描き出さなければならない。完成した精密画を知っている私が完成した精密画を知らない立場に身を置くことを求められているのである。

この複雑な関係の下で行われる私の議論を混乱なく理解してもらうためには、私は理論構築作業を行なう理論構築者の目線とその作業を観察する観察者の視点とを明確に区別して発言するべきだろう。また、一方では完成した精密画を知らない理論構築者が行う判断と、他方では完成した精密画を知っている私の判断と、この二種類の判断を私はできる限り判別できるように表現する義務を負う。こうした仕事をやりおおせるには、まずは誰が誰の何をどうしたという関係を常に明確に書き分けなければならない。しかし、私の意識はこの作業をやり遂げることができるほど研ぎ澄まされてはいない。そのうえ、いかなるときにも主語と目的語を明確に書き加えたのでは、日本語の文章は煩雑になりやすい。この二つの事情があるために、精密画を描く理論構築者とその理論構築者が行なう作業を観察する観察者および両者を設定した私の間に横たわる立場の相違は把握しにくくなる。

その結果もたらされるかもしれない混乱をいくらかでも緩和するめに、私はできる限り議論を単純化しておきたい。第一に、問題の所在を浮き上がらせることを狙って、細目には敢えて目を瞑ろうと思う。それに加えて、話の流れをも単純化することにした。理論構築者が理論素材を発見・選択してから理論を構築し終わるまでの過程は、いろいろな条件が影響を及ぼし、しかも

さまざまな作業が相互に絡まりあい、そのうえ試行錯誤が重ねられる複雑な過程となるはずである。しかし、本節に登場する理論構築者は、試行錯誤の過程を踏むことなく、直線的道程を何の迷いもなく歩み続ける。私は、さまざまな条件に拘泥することなく、このように敢えて描こうと思う。

この決意の下に、古典力学の理論構築者が精密画を描く作業を私は四段階に分けて説明することにした。最初の段階は、日常世界で生起する事象の中から理論構築者が自身の問題関心に沿って理論構築の素材を選択する段階である。理論素材の選択は理論構築に決定的な影響を及ぼすから、今回はこの点に絞ってやや詳しく検討するとともに、その結果として引き出される示唆や教訓にも触れておく。

理論構築者は、選択した理論素材を明確な言葉で表現し、その言葉を用いて現象世界を形成する。これが理論構築の第二段階である。さらに、第三段階として、理論構築者は理論素材から理論構築に必要な要素を取り出して理論構築の対象を絞り込み、分析世界を形成する。最後に、理論構築者は理論対象を論理的に操作して論理整合的理論を構築し、他者に提示する。この三つの段階を検討する作業とそこから得られる教訓は次回に取り扱う。

古典力学の論理世界を理解する私の仕事は、古典力学の理論構築者が自身の問題関心に従って自身の日常世界の中から理論素材を選択する作業を把握することから始まる。選択された理論素材の性質は現象世界と分析世界のあり方を決定する。したがって、古典力学の理論構築者が理論素材を選択する状況を理論構築者自身がどのように理解していると私が想定しているか、また理論構築者が置かれているその状況を私がどのように判断しているかを、やや立ち入って明らかにしておきたい。

古典力学は自然を対象としているといわれている。古典力学は、自然という概念を前提にして、その自然に含まれる事象の中から自身の問題関心に従って理論素材を選択しているというのであろう。このことが事実であるとしても、私はこの言明から議論を出発させるつもりはない。客観性を切り口とする私の立場を損ねることになると思うからである。私は、思考者の思考とは独立に、思考者の思考に先立って与えられていることをもって、客観性と考えている。ところが、自然という概念は思考者に対して自然に与えられた概念であるわけではない。概念は、如何なるものであれ、思考者の思考結果以外のなにものでもないのである。また、ある事象がそこに含まれているという判断は思考者が思考した結果下した判断に他ならない。思考者の思考結果を無批判に前提とすることは客観性の問題を考察する態度とは相容れない、と私は判断する。

確かに自然は人間が思考した結果として形成される概念である。しかし、自然の領域に含まれていると思考者が判断した事象自体は、思考者が思考する以前に既に与えられているという意味で、客観的存在なのである。この立場に立てば、理論の客観性を検討するためには、自然概念を前提とせずに、まずは日常生活者が日常生活を送る中で事象を知る場面を出発点とすべきである。そのためには、日常世界の性質を最初に確認しておく必要がある。一言で言えば、日常生活者が日常生活を送る中で思い描く日常世界は、日常生活者によって異なったものとなり、しかも曖昧な像でしかない。これが、日常世界の基本的性質である。

観察者の見るところ世界は事象で満ちている。日常生活を送る中で日常生活者が思い描く日常世界を構成する事象はその一部であるにすぎない。個々の日常生活者は社会の中にそれぞれ異なった位置を占めているのだから、特定の日常生活者が直面する事象の少なくとも一部は他者が直接経験するところとはならない。これが、日常生活者が思い描く日常世界が日常生活者によって異ったものとなる事態を生み出す第一の要因である。

また、日常生活者は、観察者ならば同一と判断する事象に対してそれぞれ違った受け止め方をする。このことが、日常生活者が思い描く日常世界を日常生活者によって異なったものとする第二の要因である。日常世界を構成する事象は、多くの場合日常生活者が自覚しないまま、日常生活者の思い入れや善悪美醜についての判断や評価を身にまとった事象として、日常生活者の前に現れる。日常生活者の思い入れや善悪美醜についての判断や評価を、この節では、適切な言い方ではないが、思念という言葉でまとめておく。また、過去に構築された理論や思想も事象の見え方に影響を及ぼす。仮にこれらを思考という言葉で表現しておく。

私は客観性に焦点を当てているから、思念や思考の扱いについては予め注意を払っておきたい。理論構築者が理論構築を開始する時点で既に自他の思念や思考が存在している。しかもそれらの思念や思考は相互に密接なしかも複雑な関係をもっている。理論構築者も日常生活者に他ならないから、この関係を論理的に解きほぐすことなくしては理論構築者が行なう理論構築作業と日常世界の関係を十分には解明できない。観察者はこのように判断するだろう。しかし、理論構築者は、思念や思考が日常世界の形成に及ぼす影響を論理的に解明したうえで、理論構築の第一歩として理論素材を選択する作業を始めるわけではない。しかも私は、古典力学の理論構築者が理論素材を選択する作業を理論構築者の目線に沿って把握することを通して、選択された理論素材の性質を理解することに努めたいと思っている。したがって、私は理論素材を選択する作業と思念や思考との間の一般的関係には敢えて目を瞑ることにする。

本節では、議論を単純化するために、二つの想定を設けている。第一の想定は、全ての日常生活者の日常世界は観察者ならば同一と判断する事象から構成されている、ということである。第二は、理論構築の出発点で理論構築者の問題関心や事象の見え方に影響を及ぼしている要因は理論構築者の思念のみである、という想定である。また、日常生活者が個人として抱く思念であることを強調するために、私は個人的思念という言い方を採用し、その内容はそれぞれの時点では固定されていると仮定しておく。この仮定は、理論構築者の問題関心を与えられたものとして扱う私の前提と整合的であるだろう。

日常生活者は誰しもが個人的思念を抱いている。人間の社会が一つのまとまった社会として存在している以上は、社会の構成員としての日常生活者全員に共通の個人的思念があるに違いない。しかし、個人的思念の内容は、人によりまた同一個人でも時と所により、全く同じであるわけがない。この点を受け入れるならば、仮に日常世界を構成する事象が同一であると観察者には判断できたとしても、日常生活者が形成する日常世界の様相は、日常生活者によって、さらに同じ日常生活者でも時と所によって、相違するだろう。その場合には、理論構築者の日常世界が他者の日常世界と同一である保証はどこにも存在しないといえる。理論構築者は、多様な日常世界

が存在する中で自身の日常世界を差し当たり唯一のよりどころとして、現実的で客観的かつ普遍的な理論の構築を目指して作業を開始するより他はないのである。

理論構築作業は、理論構築者が自身の日常世界の中で生起する事象の中から自身の問題関心に相応しい理論素材を選択することから、開始される。私は、理論構築者が行なう理論素材の選択作業を三つの段階に分けて、精査してみたい。第一段階は、理論構築者が日常生活を送る中で事象を知る段階である。理論構築者は知りえた事象の中から特定の事象に着目する。これが第二段階となる。最後の段階が、着目した事象から自身の個人的思念を排除する段階である。各段階ともに思いの外に困難な問題を抱え込んでいる。私は、ここではこの困難を確認するにとどめ、論理的解決に突き進むことはしない。

理論構築者は日常生活を送る中でさまざまな事象をまずは五感を通して知る他はない。しかし、人間の五感は当てにならない。第一に、五感を通して知った事象には日常生活者の個人的思念がそれと自覚されないままにまとわりついている。したがって、観察者ならば同じであると判断する事象であっても、他の日常生活者が理論構築者と同じように受け止めているとは限らない。それにもかかわらず、理論構築者は他者にも同じに見えていると確信して理論構築作業を開始する。この論点には選択された理論素材の普遍性を論じる段階で触れることになる。

また、理論構築者が五感を通して知った事象が確かに存在しているかどうかを、理論構築者自身が五感を通して確認することができない場合がある。それにもかかわらず、理論構築者は、それが確かに存在していると確信していればこそ、理論構築作業に取り掛ることができる。五感を通して知った事象が確かに存在するかどうかは現象世界を明晰な形で描き出す問題と直接かかわる。そこで、この論点を検討するのは理論構築の第二段階にまで引き伸ばしておき、理論構築の第一段階では理論構築者が五感を通して知った事象は確かに存在するものとみなしておく。

理論構築者は、確かに存在すると確信した事象の中から自身の問題関心に従って特定の事象に着目する。これが素材選択の第二段階である。もちろん、理論構築者が自身の問題関心に相応しい事象の全てを理論素材を選択する以前から知っているとは限らない。理論構築者は理論構築の過程で多くの事象を視野に入れるようになり、視野の拡大は理論構築作業の進め方にも影響することだろう。しかし、この節では、理論構築者は自身の問題関心に相応しい事象の全てを最初から視野に入れているものと想定しておく。

関心のある全ての事象を知った理論構築者は、自身が着目した事象から自身の個人的思念を排除した部分を理論素材として取り出す。これが理論素材を選択する第三段階となる。理論構築者は五感を通して事象を知った段階では個人的思念を必ずしも明確には自覚していない。理論構築者は、日常世界で生じた事象から個人的思念を明確に排除するためには、自身の個人的思念を明確に自覚するようになっていなければならない。そうなるまでには、理論構築者はさまざまな体験を経て、いろいろと思考を積み重ねていることだろう。こうして自覚された個人的思念の内容が不充分で、ときには何らかの意味で誤りですらあるかもしれない。さらに、社会の全構成員が共通に抱く個人的思念はそれと自覚されにくいことだろう。しかし、理論構築者は理論素材を選択する段階で既に自身の個人的思念を明確に自覚するに至っており、その内容は妥当なものであ

る、とこの節では想定しておく。

それでも困難は残る。一般的には、個人的思念の排除は事象を客観的に認識するのに不可欠の手続きであるように思われている。しかし、理論構築者が過去に積み重ねてきた思考の結果として始めて自身の個人的思念を明確に自覚するようになるのであれば、五感を通して知りえた事象から明確に自覚された個人的思念を排除しても客観性を確保できる保証はどこにもない。この問題には、理論構築者が選択した理論素材の客観性を論じる段階で立ち向かう。

形式的にいえば、この三つの段階を経て選択された理論構築の素材が現実的で客観的かつ普遍的であれば、その一部である理論対象も、その対象を論理的に操作することで構築される理論も、現実的で客観的かつ普遍的性質をもつだろう。理論素材が現実的存在であると理論構築者が判断することは納得しやすい。古典力学の理論構築者が着目した事象は自身の日常世界を構成する事象の一部である。日常生活者にとっては日常世界こそが現実であるのだから、自身の日常世界で生起する事象の中から選び出された理論素材は現実的存在なのである。これに対し、理論素材が客観的かつ普遍的存在であるかどうかの判定には思わぬ落し穴がある。

私の用語法に従えば、理論素材が客観的であることは、理論構築作業の前提として、理論構築作業に先立って、理論構築作業とは独立に、理論構築者が関心を寄せても寄せなくても、理論素材が存在していることを意味している。理論構築者の作業に先立つ存在を、理論構築者は、理論構築作業の中で実践する思考によってではなく、理論構築作業を開始する前に自身の五感を通して予め知っているのでなければならない。私は五感を通して知ることになる存在を感覚的所与と呼んでおく。すると、古典力学の理論素材が客観的存在であるかどうかを問うことは、理論素材が感覚的所与であるかどうかを問うことと同じ意味になる。

この問いに対する解答は一見すると極めて単純である。理論構築者は日常生活の中で五感を通して事象を知る。この事象は、理論構築作業の結果としてではなくその前提として五感を通して知った事象であるから、感覚的所与である。理論素材は、この感覚的所与の一部であるから、感覚的所与であるに違いない。しかし、古典力学の理論素材は感覚的所与としての事象から自身の個人的思念を排除した部分である。素材選択の段階で理論構築者が抱く個人的思念は、さまざまな体験を踏まえて自身の思考を重ねた結果である。そうだとすれば、感覚的所与として日常生活の中で理論構築者の眼前に現れる事象から自身が過去に思考した結果ともいえる個人的思念を排除した残余を単純に感覚的所与と考えるわけにはいかなくなる。むしろ、理論素材は理論構築作業を開始する以前に理論構築者が積み重ねた過去の思考によって作り出された、と判断することすら可能である。

もちろん、感覚的所与から感覚的所与を取り除いた残余も感覚的所与であるという判断は成立しうる。したがって、理論構築者にとって日常世界の事象に加えて自身の個人的思念も感覚的所与であるならば、理論素材は客観的存在であることになる。しかし、理論構築者は、他者の個人的思念を感覚的所与として把握することはできたとしても、自身の個人的思念を感覚的所与として把握することはできない。理論構築者の個人的思念を理論構築者の外側から眺め五感を通して把握することができる者がいるとすれば、それは、全ての日常世界と全ての個人的思念を自身の

外部に存在するものとして自身の五感を通して知ることができる者であろう。それは日常世界から超越している存在に他ならない。

個人的思念を考慮に入れるとき、日常世界で生起する事象を感覚的所与として扱ってしまっては不都合が生じる。そこで、個人的思念を含まない理論素材こそが感覚的所与であると考えてみよう。このときには、理論構築者が日常世界の中で五感を通して知る事象は、理論構築者が送る日常生活の中で抱くようになった個人的思念が感覚的所与としての理論素材に付加された事象として認識される。ここから個人的思念を排除することができれば、感覚的所与としての理論素材が姿を現す。この場合、感覚的所与としての理論素材は、理論構築者が送る日常生活や自身の個人的思念とは独立に存在している。その意味で、感覚的所与としての理論素材は日常生活の外部に存在している。日常生活の中で理論構築者が五感を通して知り得た事象から自身の個人的思念を排除する作業は、日常世界に組み込まれていながら、日常生活がどのようなものであっても、日常生活の外部にそれとは独立に存在する感覚的所与を発見する作業として実行される。この作業を行なう理論構築者は、日常生活を送る中で、日常生活の外部に存在する理論素材を日常世界の中で把握する立場に立ことになる。

日常生活の中では眼前の事象を感覚的所与として受け止めている。他方、理論構築作業を開始するにあたっては、このことを否定し、日常生活の外部に存在する事象を感覚的所与として受け入れている。この乖離の中には解決すべき論点があるように思う。しかし、本節では、この論点を明確に把握したうえで論理的に明快な解答を求めることは断念する。

古典力学の理論素材がもつことを期待されている三番目の性質が普遍性である。古典力学の理論が、どこでもいつでも当てはまりしかも誰にでも受け入れられるという意味で普遍的であるためには、古典力学の理論素材は普遍的存在でなければならない。気候条件や地理的制約を無視して一般的な言い方をすれば、日常生活者が形成する日常世界が人と時と所により異なるとしても、全ての日常世界に共通に存在するという意味で時空を超えた存在を普遍的存在と呼ぶことができるだろう。この場合、日常生活者の五感が同一の構造をしている限り、全ての日常生活者は時空を超えた存在を認知することができる。理論素材が時空を越えて存在していることを存在の普遍性という言葉で表すとすれば、それが存在していることを誰もが認知することを認知の普遍性と名付けてもよいだろう。古典力学の理論素材は二重の意味で普遍性をもっていることを要請されているのである。

しかしながら、理論構築者は他者の日常世界を直接知ることはできない。それゆえ、古典力学の理論構築者が選択した理論素材が普遍的存在であるかどうかを、理論構築者は理論構築の出発点では直接知ることはできない。しかし、理論素材は理論構築者の日常世界の内部にありながら日常生活の外部に存在する。この理解が正しければ、古典力学の理論構築者が選択した理論素材は全ての日常生活者が形成する日常世界の内部にありながら、全ての日常生活者が送る日常生活の外部に存在している。したがって、理論構築者が送る日常生活の外部にある理論素材は全ての日常生活者が送る日常生活の外部にも存在しているから普遍的存在であり、構築される理論も普遍的理論である。このように理論構築者は確信することができる。

理論構築者が構築した理論が時空を超えて成立するとき、理論素材が客観的で普遍的に存在していたことを理論構築者は改めて確認できる。この意味では、古典力学の理論構築者が行なう理論構築作業は理論素材の客観性と普遍性を確認する作業でもあるといえる。しかも、全ての日常生活者は同じ人間として同じ五感の構造をもつから、この理論素材が存在することを認知することができる。そのうえ同じ人間として他者が正しいと認めた論理を正しいと認めることができるだろうから、古典力学の理論は全ての日常生活者が承認可能な理論となる。構築された理論の性質については第四節の後半で再び取り上げてみたい。

古典力学の理論素材は日常生活の外部に存在するがゆえに客観的で普遍的性質をもつ、と私は考えてみた。一方、経済理論の素材は日常生活の外部に存在するわけではない。とすれば、経済理論は客観的で普遍的理論ではありえないことになる。しかし、理論構築者の作業を考察することを抜きにしたまま古典力学と経済理論の理論素材を単純に対比するだけで、この結論に安住してしまうのでは、問題の深さを測り損ねることになる。そのように私は危惧する。そこで、私は、古典力学と経済理論の理論構築者が行なう素材選択作業をあえて同一の平面に据えて、理論素材の相違がもつ影響を確認してみることにした。

私の判断では、理論素材の相違は理論構築者の問題関心の違いと結びついている。問題関心が違えば、観察者が見て同じ事象からなる日常世界の中で理論素材を選択するとしても、選択される理論素材は異なったものとなり、選択された理論素材が構成する世界も違ってくる。この世界が明確な言葉で表現されるとき、私の三世界図式における現象世界が形成される。しかし、ここではまだ理論構築者が理論素材を選択した結果を日常世界とのかかわりを強く意識して検討しておきたいから、私は世界という曖昧な言葉を敢えて使用しておく。

異なった理論素材を選択した結果を比較するため、古典力学と経済理論の理論素材をともに含むという意味で両者に共通の世界を設定する方法を私は模索することにした。本節では古典力学の論理世界を追究している。しかも、経済理論はその古典力学を模倣している。この事情を考慮すれば、古典力学の理論素材のみを含む世界を経済理論の理論素材をも合わせて含む世界へと組み替える作業を行なうのが、共通の世界を設定する順当な道筋というものだろう。この道を歩む第一歩として、私は、理論構築者が理論素材を選択する作業の前提として区分作業を行っていることに着目した。

理論構築者は、日常生活を送る中で五感を通して知ることになった事象を、自身の問題関心に沿って、着目すべき事象とそうでない事象に振り分ける。これが最初の区分作業である。これに続いて、理論構築者は着目した事象に対して理論構築者が抱く個人的思念をその事象を構成する特徴の中から取り分け、これを排除することで理論素材を確定する。古典力学の理論構築者は、この二種類の区分作業を自身の関心事に従って遂行し、自分が関心をもたない事象やその事象にかかわる個人的思念を視野の外に置く。それゆえ、古典力学の理論構築者が形成する世界には古典力学の理論構築者が関心をもった理論素材のみが存在する。

私は、観察者であれば知りうる一切の事象に対してこれらの区分作業を適用することで、理論構築者が被る制約を乗り越えたいと思う。しかし、観察者は、理論構築者とは異なり、理論構築

作業を行なうために特定の問題関心をもって日常世界を眺めているわけではない。私は古典力学の理論構築者が理論構築の出発時点で形成した世界を議論の出発点としているから、私が設定する観察者は古典力学の理論構築者からその問題関心を拝借するものとみなしておく。観察者は、古典力学の理論構築者が抱く問題関心に従って、観察者が知る全ての事象を振り分け、全ての事象に対して全ての日常生活者が抱く個人的思念を取り分ける作業を行なう。

古典力学の理論構築者が行なう区分作業に従って観察者が設定する世界には、古典力学の理論構築者が選択する理論素材はもちろんのこと、経済理論の構築者が選択する理論素材が、両者に無関係な要素とともに、含まれている。古典力学の理論構築者が関心をもつ理論素材だけから構成される世界は、古典力学の理論素材と経済理論の理論素材をともに含むという意味で両者に共通の世界に組み替えられたのである。私は、特定の問題関心と区分作業に沿って組み替えられた世界を一般に再編日常世界と名付け、特に古典力学の理論構築者が抱く問題関心に従って再編された日常世界を古典力学の日常世界と略称する。これに対して、日常生活者が日常生活を送る中で形成する日常世界を原日常世界と呼んでおく。

古典力学の日常世界に関しては、少なくとも二つの論難を予め指摘しておかなければならない。一つは、原日常世界を再編する作業は古典力学の理論構築者が抱く問題関心に従って行なわれているので古典力学の日常世界は客観的性質をもたない、という非難である。もう一つは、原日常世界の再編は言葉による区分作業を前提としているから理論構築の第二段階でなされるべき議論を先取りしている、という批判である。

まず、最初の非難から取り上げよう。特定の問題関心に従うこと自体は客観性の基準に抵触するわけではない。このことを最初に確認しておく。客観的であるということは、私の用語法に従う限り、思考者が関心を寄せた事象が、思考者の思考結果としてではなく、思考の前提として与えられており、思考者が関心を寄せようが寄せまいが存在していることを意味している。私の判断では、再編日常世界を構築するための材料はこの条件を満たしている。

古典力学の理論構築者は、関心を寄せた事象から自身の個人的思念を排除することで理論素材を引き出した。この理論素材は日常生活の外部に存在するから客観的であっても、排除された個人的思念は客観的とはいえない。ところが、観察者が再編した古典力学の日常世界には古典力学の理論構築者が客観的世界から排除した個人的思念が含まれている。その意味では、古典力学の理論構築者の目からは、古典力学の日常世界は客観的世界ではないように見えるのも当然である。

他方、観察者は、全ての日常世界で生じる全ての事象を知っており、理論構築者を含む全ての日常生活者が送る日常生活とその下で抱かれる個人的思念を把握している。観察者にとっては、全ての事象と全ての個人的思念は、観察者自身による思考の結果ではなく、思考の前提として与えられている。その意味では、全ての事象と全ての個人的思念とは観察者にとっては客観的存在である。私はこのように考えておきたい。

第二の批判は、概念化の取り扱いに関係している。理論構築者が行なう区分作業は、理論構築者の頭の中で、原日常世界で生起する諸事象を分別し、自分が選択した事象をいくつかの特徴に

分解し、自身が明確に自覚した個人的思念を理論素材と区別する作業である。こうした作業は原日常世界で生起する事象を概念として把握する作業にほかならない。その限りで、区分作業を全ての事象に適用することで組み替えられた再編日常世界は概念によって構成された世界であることに間違いはない。

それでも、私は理論素材を明確な言葉で表現する作業を理論素材の選択作業とははっきりと区別して取り扱いたい。原日常世界と再編日常世界の間に横たわっている裂け目を見逃したくないからである。概念によって表現された再編日常世界は、明瞭な内容をもち、他者と共有可能な世界として現れてくる。他方、原日常世界は、第三節で述べたように、曖昧で個人的な世界であった。原日常世界を再編する作業は、原日常世界がもつ曖昧さと個人的性質とを捨て去る作業でもある。この作業の結果として原日常世界と再編日常世界とは相反する性質をもつことになるが、他方では原日常世界を前提にしなければ再編日常世界も存在しえない。しかも理論構築者の頭の中では、それと気付かれることがないかもしれないが、原日常世界と再編日常世界はいわば同居している。

観察者であれば、議論を先に進める前に、原日常世界と再編日常世界の関係を明確に整理しておきたいと思うことだろう。しかし、古典力学の理論構築者はその整理を自覚的に行なったうえで理論構築作業を開始しているわけではない。そのこともあって、私は、概念化が生み出すこの問題を理論素材を言葉で表現する理論構築過程の第二段階にまで持ち越すことにし、ここでは古典力学の日常世界に議論を集中させる。

古典力学の理論構築者は、日常生活を送る中で関心を抱いた事象から、日常生活を送る中で自覚するに至った自身の個人的思念を排除することを通して、日常生活の外部に存在する理論素材を日常世界の中に発見した。この作業を観察者の知る全ての日常世界で生起する全ての事象に適用すれば、大雑把にいって、原日常世界は日常生活の外部にある領域と内部の領域とに二分される。ここでは、前者を自然界、後者を人間界と呼び分けておく。観察者が描く古典力学の日常世界は確かに単純すぎる。しかし、本節の課題は古典力学の論理世界における基本的構図を検討することにあるのだから、ここでは単純な古典力学の日常世界を前提にして話を進める。そのうえで、経済理論の論理世界を考察する際の教訓を引き出しておく。

観察者の整理に従えば、古典力学の理論構築者は原日常世界を自然界と人間界に二分し、自然界から理論素材を選択した。自然界を構成する事象は日常世界の内部に存在するから現実的であり、その事象から個人的思念を排除して発見される古典力学の理論素材は日常生活の外部に存在するから客観的かつ普遍的存在である。しかし、経済理論の構築者が古典力学の日常世界を承認し、古典力学の日常世界の中で経済理論の理論素材を選択するのだとすれば、経済理論の構築者は大きな困難に直面することになる。

経済理論の構築者は、現実的で客観的かつ普遍的にして形式的に厳密な理論を求め、古典力学を模倣した。当然、暗黙のうちにせよ、古典力学の日常世界を受け入れていると考えることができる。もし経済理論の構築者が古典力学の日常世界を受け入れることを拒否しているのであれば、古典力学が現実的で客観的かつ普遍的な理論であることの根拠を改めて明確にする必要に迫

られるはずである。しかし、経済理論の構築者はこの点を気にもしていないように見受けられる。

経済理論の構築者が古典力学の日常世界を暗黙のうちにせよ受け入れているとすれば、経済理論の構築者は人間界と自然界のいずれかから理論素材を選択していることになる。経済理論の構築者が選択した理論素材が自然界の一部であるならば、経済理論は現実的で客観的かつ普遍的な理論であると主張することはできる。しかし同時に、経済理論は、社会現象ではなく、自然現象を扱う理論になってしまう。逆に、経済理論の構築者が人間界の中から経済理論の素材を選択しているのであれば、経済理論が社会現象としての経済を扱う理論であることは承認される。しかし、経済理論の構築者は経済理論が現実的で客観的かつ普遍的な理論である根拠を改めて説明しなければなくなる。

古典力学を模倣し古典力学の日常世界を受け入れるだけで現実的で客観的かつ普遍的な経済理論を構築できるのだと経済理論の構築者が考え続けるのであれば、経済理論を巡る混乱は続くことになるだろう。逆に、古典力学の日常世界を放棄してしまえば、経済理論の構築者は、改めて経済理論の日常世界を自覚的に構築し、その中で選択される理論素材の現実性と客観性および普遍性を保証しなければならなくなる。さらに、この困難な課題を解決しても、厳密な数式で表現される論理整合的理論を構築することはできないかもしれない。